

旅人
国定龍次

たび

にん

くに

さだ

りゅう

じ

下

山田風太郎



たびにん くにさだりゆうじ
旅人 国定龍次 (下)

やまだふうたろう
山田風太郎

© Futaro Yamada 1989

1989年5月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願い
いたします。(庫一)

ISBN4-06-184470-9



談社文庫

旅人 国定龍次 (下)

山田風太郎

講談社

目次

駿・遠・参(承前)

勢州

京洛

信州

解説

七

四

一八

三六

繩田一男
三六

旅^{たび}
人^{にん}

国^{くに}
定^{にさだ}
龍^{りゆう}
次^{うじ}

(下)

駿・遠・参（承前）

十四

次郎長一家は、また山道をたどって、石松の故郷森を経て掛川へ、それから東海道を東へ、清水港^{みなと}に帰る。

別れるとき、

「何かあつたら、清水へ急使をたてろ」

と、次郎長は仁吉にいった。

仁吉と長吉とお勢は、四、五人の乾分^{こぶん}を連れ、龍次とヒゲ万先生を伴って、浜松に出る道をゆく。そこから西へ、吉良に帰るのだ。

途中、一団からちよつとおくれて、龍次と二人だけになったとき、ヒゲ万先生がいった。

「いや、毎度の感想でござすが、渡世人の世界も虚々実々でござすな」

「な、何が？」

「神戸の長吉の親分は、清水一家が乗り出してきて、荒神山を乗っとられるのを警戒しちよるらしか」

「ふうん」

「片や、清水一家のほうは——特に軍師格の大政どんなどは、いまや東海一となった清水一家の勢力をこんどは伊勢にひろげようと、虎視たんたんとうかががちよるよううで」

「へへえ」

「それを、神戸の親分はこわがちよる。のどから手の出るほど助ッ人が欲しいにかかわらず、でござすな。一方、吉良の仁吉どんに對しちや、荒神山をとり返したらお勢さんと祝言をあげる、とかいっちよったが、ひよっとすると、祝言をエサに荒神山を釣りあげるように、仁吉どんの尻をたたいてるのかも知れもさんぞ」

「ふはーっ」

「たんげいすべからざるのは次郎長親分で、決してムリをしようとはせん。長坂橋で十万の敵をにらみすくめた三国志の張飛のごとき一面を持つ一方、ひくときはひく——ありや、みかけによらず、老獪なひとでござすな」

「ははん」

「思い出す、富士の裾野でおいと刀を合わせたとき、相手の刀の手応えが柔らかけりや逃げるといいもしたが、あのムリをせん剣法を、やくざ同士のかけひきにも使っちよるらしか。これも次郎長どんが東海一の大親分になったゆえんでござしような。龍次親分、よく見て、将来の参考に」

なさるがよか」

「そ、そんなことは、いつさいがっさいこっちは関係ねえ。おれはただ助ッ人にゆくんだ」
龍次の頬は活気の血に燃えている。

「先生、そ、その蛇使いの香具師と、あの祐天仙之助がつるんで歩いてたというところ——祐天も敵の中にいるね」

「あ、そげなことになりもすな」

「な、なんだか、いよいよ面白くなりそうだ」

「頼んだおひとが、あげな美人でござすしな、あははは」

「そうよ、こ、こりや一肌ぬがずにやいらねえ」

「そげなこと、おりん坊にきかれたら、ぶじではすみもさんぞ」

——おりんとは、甲州の猿屋楼以来会っていない。あのときおりんは、神官の娘お雪をみごといつれ出してくれたが、そのあとみずから姿を消してしまったという——。

龍次は首をすくめて、

「あいつ、いまごろ、ど、どこにいるのかな？」

「ひよっとしたら、秋葉山へもきてたかも知れもさんぞ」

ヒゲ万の声は冗談まじりのものであったが、何気なくぐるりと見まわした龍次が、
「あ！」

と、驚きの声をあげた。

「先生、いま通つてきた村の、ほれ、あの水車小屋の向こうに——ちらっと見えてかくれちまつたが、あ、ありやたしかにおりんだつたようですぜ！」

「そりゃ」

ヒゲ万先生も驚いた顔で、二、三步、足をかえした。

「ま、待つておくんなさい、いま会つてもどうしようもねえ」

龍次はとめた。

「それよりこつちは、これから吉良の助ッ人だい」

「吉良の付け人とは、あんまりエンギがよかごわせんな」

と、ヒゲ万先生は、足をもとにもどしながら、大笑した。

十五

吉良の付け人とはエンギでもない——と、ヒゲ万先生が笑ったときは、ただ言葉の上の連想からであつたが、三河の吉良の庄にいつてみて、そこが元禄の昔、ほんとうに吉良上野介の所領であつたときいて、二人はめんくらつた。

それどころか、土地の人々は、いまなお頑固に、あの事件は浅野のほうが悪い、吉良上野介さまは悪くないと信じて、ここでは旅芝居でも忠臣蔵はやらせないという。——

何にしても、吉良は、小さいが美しい港の村であつた。

ここで龍次たちは年を越した。

「先生、ヤットー、お強いんだってねえ」

ここにきてからまもなく、仁吉がいった。

「大政のあにいらききやしたよ、どうか乾分こぶんに稽古をつけてやっておくなせえ」

その乾分は、まだ十人くらいしかいなかった。

稽古をつけてやってくれ、といったが、その乾分たちはほとんど家にいない。みんな外を出歩いている。

仁吉自身がそうだ。

彼らは、新しい助すけツ人を求めて、近郷をまわっているのであった。

伊勢の穴太あなうの徳次郎からはその後何もいってこないが、それでこちらは太平楽をきめこんではいられない。ことしの四月八日は荒神山の祭りだ。それまでに荒神山はとり返さなければならぬ。

それには、なぐりこみのほかはない。

で、仁吉たちは味方を狩り集めるのに大わらわになっているのであった。だから、むろん龍次たちも簡単にここをおさらばするわけにはゆかない。

しかし、いまのところ、ほかにやることがないので、二人は毎日のように、海に釣りに出かける。

このあたりは黒鯛の名所だそうだが、鯛はおろかイワシもめったにかからない。どうも二人は

釣りに不向きらしい。

「ひねもすのたりのたりかな、の季節になりもしたな」

と、磯から竿を出したヒゲ万先生が、海のかなたを眺めている。

渥美半島と知多半島にかこまれた大きな入り江は、碧い油をながしたようで、ほんとうに、のたりのたりという音をたてていた。

海がぬるみはじめたのもむりはない。三月の末だ。

「こげなのどかなところに住んで、わざわざなぐりこみの支度に血まなこになっちよるとは、正気の沙汰じゃなかようでごわすな」

「渡世人の世界は、け、景色たア無縁だよ」

龍次も釣り糸をたれたまままで、

「それでもこのごろ、よ、四人も御浪人を連れてきたしき。ほかに、いざ出陣となったら近くからかけつけて助ッ人になってくれるのが、十人くれえ出来たらしいぜ」

「ふむ、あの浪人衆、街道から拾ってきたうちう話でごわすが、それにしても拾い方がうまか。——あの中で、少なくとも二人はなかなか出来もすぞ」

「そうですか、そ、そりやよかった」

「じゃが、ひとの縄張りをとり返してやるのに、仁吉どんも御苦労なことでごわすな」

「あはは、早くお勢さんと祝言をあげてえんだろ」

「いや、おいははじめ、長吉どんがお勢さんをエサに仁吉どんを釣つてると見ておりもしたが」

ヒゲ万も笑いながら、

「それもまちがいななことと思いますが、長吉どんもさることながら、あのお勢さん自身が、荒神山をとり戻すのにいっしょけんめいでごわすな。それに仁吉どんが煽^{あお}られちよるらしか」

「ありや、みかけによらず気丈な女だな」

と、龍次はいった。

「しかし桑名の黒田屋勇蔵親分の娘として、こ、荒神山をとり返さずにやおかねえと考えるのも当然さ」

「とり返して、めでたく夫婦になっても、仁吉どんはきつと尻にしかれもすぞ」

「その心ぺえは、おれんとこと、おんなじだなあ。……」

うっかりつぶやいて、ヒゲ万先生が大声で笑い出したので、大あわてで、

「しかし、に、仁吉あにいはいは、ありや気のいいひとですぜ。と、とにかくこっちも、荒神山のとり返しにや、ち、力になつてやらなけりやならねえ」

と、いつて龍次は竿を大きくあげた。

何か、かかったと思つたのだが、波の上にはねた糸の先にはエサもなかった。

「あはは、だめでござんすねえ」

と、うしろから、ふいに声がかかった。

驚いてふりかえると、頬かぶりしたやくざ風の若い男が一人立って、笑っていた。

「それじゃ、魚が食いついてくれるわけがありませんや。だいいち竿の持ちかたからして、なっ

てねえ」

と、近づいてきて、

「ちよつと貸してみなせえ」

龍次の釣り竿をひったくつて、海にさしのばした。

——と、煙草を一服のむかのまないかに、その竿はみごとな黒鯛を一匹、高だかと空中に躍らせていた。

その鯛を惜しげもなく海へ投げて、「それ、こつやつて、こつやつて、こつやつて」と、その男は手に手をとつて、龍次に竿のにぎりかたから教える。

「どれどれ、おいにも教えてくれ」

ヒゲ万先生も、身をのり出して指導を請う。

やがて、その通りにやつて、まず龍次が、ついでヒゲ万先生が、それぞれりっぱな黒鯛を釣りあげて——あらためて感嘆の眼をその男に投げて、

「はてな、おはん、この近くのおひとじやなかな」

と、はじめて気がついて、ヒゲ万先生がしげしげと相手の男を眺めた。三ヵ月以上もこの小さい港に暮らしていれば、それくらいのこととはわかる。

龍次が小声できいた。

「吉良のあにいのとこに、す、助ッ人にきてくれたひとかい？」

「えへへ、まあ、そんなところで……ま、あとでお目にかかりやしよう」

と、男は笑って、そのままスタスタと村のほうへ帰っていった。

「何だか、へんなやつだな」

ヒゲ万先生が見送って、首をかしげてつぶやいた。

「ところで、先生」

と、龍次が竿をおいていった。

「助ッ人で思い出したが、ここんところしばらく刀をふりまわさねえんで、腕が、ナ、ナマクラになっちまったよう——さいわい、だれもいねえ、ここでひとつ、例の、け、稽古をつけてくれませんか」

しばらくのち、龍次とヒゲ万先生は海辺で相對していた。例によって、龍次は小松五郎の長脇差、ヒゲ万は近くでひろった櫂の折れた。

「そういえば、何やら虫が知らせる。龍次親分がその刀をふるうときが近づいているような気がしもす。おいをほんとに斬る気で——ええか」

海光を背に、龍次の影がおどり、ヒゲ万先生がなぎさによろめいたように見えた。

が、そのあとつんのめっていつて、モンドリ打って砂に這ったのは、やっぱり龍次のほうであつた。刀をほうり出し、片手で右腕をかかえてうめいている。

「や、打ったか」

片足、波に洗わせていたヒゲ万先生が、心配そうに近寄った。

「いや、すんでのことで、こっちがほんとにやられるところじゃった。手ごころなど加える余裕